

ラグビーにおける競技者人口と観戦者数の関係性 Relations between population of athlete and number of those who charge watch for rugby

1K03B215-9 氏名 若野 祥大

指導教員 主査 間野 義之 先生 副査 中竹 竜二 先生

【緒言】

近年日本国内ではラグビー人気の低迷が顕著に現れている。日本ラグビー界における1番のビッグゲームである大学ラグビー関東対抗戦早明戦の観客動員数は1982年66999人を記録した。これは、国立競技場の観客動員記録になっている。この記録は消防法の改正により、立ち見客が認められなくなったため、現在では更新不可能な数字になっている。そんな早明戦も2004年には39307人で4万人を切ってしまった。このように日本ラグビーはここ10数年で大きく低迷した。

2006年3月付けのIRB(International Rugby Board)ランキングでは日本は世界17位とランキングされた。(ワールドラグビーニュース)同じく2006年3月付けのFIFA(Federation Internationale de Football Association)ランキングでは世界18位とランキングされた。(FIFA 世界ランキング)近年スポーツ界ではナショナルチームの強さが競技の人気に直結する傾向にある。同じ世界ランキングにもかかわらずサッカーはラグビーに人気の面で確実に水をあけたと言える。

本研究はスポーツの人気の指標とも言える競技者人口や観戦者人口を増やすことを目的とし、ラグビーにおいては競技者人口と観戦者人口に相関性があるという仮説のもとその検証を行い考察する。

【方法】

関東ラグビー協会から1981年から2004年までの秩父宮ラグビー競技場、国立競技場で行われた関東ラグビー協会主催の関東大学対抗戦、リーグ戦の試合の収支をお借りし、そこから有料観戦者数、入場料収入、放送権料収入、総収入を抽出した。また日本ラグビー協会から、1981年から2005年までのチーム数、1992年から2005年までの競技者人口のそれぞれ地域別・年代別データをお借りした。そのデータをSPSSによって、競技者人口と有料観戦者数、入場料収入、放送権料収入、総収入それぞれに相関関係があるのかどうかを地域別・年代別に分析した。地域とは関東地方、関西地方、九州地方で、年代とは社会人、大学生、高校・高専生、中学生、ラグビースクール生(小学生以下)のことである。

【結果】

分析を行った結果、有料観戦者数と放送権料収入に競技者人口との相関性が見られた。よって、この二つに限って、次に競技者人口の地域別・年代別との相関性関係を調べるために分析を行った。

この結果、目立った結果が大きく分けて三つ表れた。1つは全ての地域の社会人と放送権料収入に1%水準の相関関係が見られた。二つめは全ての地域の高校生と有料観戦者数にも1%水準の相関関係が見られた。三つ目は中学生からは、関西・九州地方と有料観戦者数に1%水準に相関関係が見られた。つまり、有料観戦者数が増えれば競技者人口が増える関係にあることが、高校生、関西・九州地方の中学生において言える。

また、放送権料収入が増えれば競技者人口が増える関係にあることが社会人において言える。

【考察】

全体を通して、有料観戦者数に相関性が良く見られたのは中・高・大の部活動世代であった。これは学生は部活動の存在によりラグビーを始めやすい環境・年齢にあるという理由が考えられる。この世代ではラグビーを見てやりたいと思った人間が実際に始められることが、今回の結果に反映されている。特に高校生に関しては中学や大学よりも全国的にラグビーが部活として存在しより始めやすい環境にあると言える。が考えられる。つまり、有料観戦者数が増えれば競技者人口が増えるということが、全国的に高校生、関西・九州地方の中学生の間で言えると考えられる。そして新たに始めた競技者、その周りの人がまたラグビーを見に行き観戦者数の増加につながるということも想像される。また、放送権料収入をラグビーのメディアでの人気の指標のひとつと考え、ラグビーのメディアにおける人気は社会人の競技人口に関係する、と推測される。

【結論】

日本において観戦者数を増やすには、まずは高校生と関西・九州の中学生の競技者人口を増やすことが重要であると思う。しかしこの競技者→観戦者という構図ではラグビーはコアなマイナースポーツを脱しきれないだろう。新たなファン層の獲得方法を探ることが今後の日本ラグビー界の課題であると思う。